

氏名	荒木 智子			
ヨミガナ	アラキ トモコ			
学位の種類	博士（学術）			
学位記番号	博美第677号			
学位授与年月日	令和4年3月25日			
学位論文等題目	（論文） ジャン・ロレンツォ・ベルニーニと17世紀の「死」のイメージ			
論文等審査委員				
（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	越川 倫明
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	田辺 幹之助
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	佐藤 直樹
（副査）	國學院大学	教授		小池 寿子

（論文内容の要旨）

イタリア17世紀における不世出の芸術家、ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ〔1598-1680〕が、生涯にわたり良きキリスト者であろうと努めたことは一般的にはあまり知られていないかもしれない。同時代の伝記を紐解くと、敬虔に宗教的実践を行う作家の姿が散見される。この宗教的実践とは、15世紀に北部ヨーロッパで誕生した「往生術」（Ars moriendi）という文芸ジャンルの内に規定されるものである。平たく言うと、キリスト者として「善く生きることで善く死」に、肉体的な「死」を転換点として永遠の世界へ向かうための準備としての善行を積むことである。「往生術」の伝統は、北方で15世紀に萌芽し、殆ど同時期にイタリアに渡ったが、16世紀の半ばには一度沈滞したかのように思われた（A. テネンティ）。しかしながら、ベルニーニの人生と同時並行的に、幾つかの要因が重なり合うことで再興する。「往生術」伝統に関連する美術の様態には、肉体的な「死」に重きを置くその教えにより、必然的に「死」のイメージが付き纏った。それは朽ち腐敗していく人体を墓碑に表した「トランジ墓」や、《死の舞踏》に代表される踊る骸骨の姿に表れているが、17世紀では新たな姿でベルニーニに主導されるかのように、ローマの街の様々な聖堂内に3次元の彫刻として自律した姿で立ち現れる。本稿の目的は、17世紀のイタリア・ローマを生きたジャン・ロレンツォ・ベルニーニによって、主に作品の中に記録された「死」のイメージを精査することで、17世紀のローマに再び生まれた「死」のイメージに対する熱狂と、キリスト教的精神史や史実としての社会背景との関わりを明らかにする事である。

第1章では、まず「往生術」の成り立ち、そして来るべき死のために予め様々な準備を行うという考え方の背景について説明する。その上で、17世紀初頭のローマにおいてこの奇妙な伝統が復活を遂げた理由を、イエズス会を中心とした文芸、活動といった同時代におけるキリスト教的精神の趨勢の中に根拠を求めた。その上で、こうした活動にこたえるようにベルニーニによって制作された「死の像」を伴う作品（主に墓碑彫刻）を時系列に概観していく。「往生術」の再興は、カトリック改革期における最も優れた神学者であり改革の功労者であった枢機卿ロベルト・ベッラルミーノによる著作『善き死のための術』の刊行に負うところが大きく、彼はベルニーニと制作を通じても繋がりがあがる。さらにヴィンチェンツォ・カラファによる1648年「ブオナ・モルテ信心会」の設立に始まり、同時代のローマの神学者サークルの繋がりと活動について整理する。こうした背景を改めて紐解くことで、ローマにおける「往生術」再興の契機を探った。

第2章では、1章で明らかにされたキリスト教的精神の潮流という捉え難い思想的背景に加え、「死の像」復活の決定的な要因となり得た黒死病（ペスト）の再流行という具体的な歴史的背景について言及する。これらは特に墓碑の歴史上でも特に有名な「死の像」を有する2基の教皇墓碑の主である、ウルバヌス8世とアレキサンデル7世の治世に関わるものである。また、「死の像」としての頭蓋骨や骸骨の写実的な描写の背景に、同時代の解剖学の発展が関わっていることを指摘する。

最後に第3、4章において、ベルニーニ晩年の2作品、素描《キリストの血》と彫像《救世主キリスト》を取り上げる。この私的な作品は、死を間近に控えた作家の精神性を最も反映した最後の宗教的实践であったと言える。幼くして作家として大成し、名だたる貴頭のために制作を行ってきたベルニーニは、自身の死を間近に控えキリストの恩寵を世界に届けようと最後の「往生術」を行う。ここに至っては「死の像」はもはや表面的には現れないものの、作家自身の肉体の「死」を前提に、安らかで静謐な魂の救済のための黙想がテーマとなる。また《救世主キリスト》像に垣間見える初期キリスト教におけるキリスト像の図像伝統との関連性について指摘する。キリスト教考古学の黎明期にあった同時代では、ローマの地下にまつわる発掘の記録をまとめた書物が立て続けに刊行される。ベルニーニの同時代人では、アントニオ・ボジオやイエズス会士アタナシウス・キルヒャーら、著名な教会歴史学者が活躍した。古代の「死者の街」の再発見は少なからず同時代に生きる人々の「死」への意識に影響を与えたはずである。また、こうした教皇庁主導の旧世界の発掘事業に、建築家としてベルニーニが協働しており、初期キリスト教の遺物に触れる機会を十分に有していたことにも言及する。本稿全体を通してベルニーニの年齢の変化と重ね合うように、ローマにおけるキリスト者の「死」をめぐるイメージが、イエズス会を中心とした思想やローマの社会の趨勢と共に徐々に変化していったことを指摘する。

#### (総合審査結果の要旨)

本論文は、イタリア・バロック彫刻を代表するジャン・ロレンツォ・ベルニーニ（1598—1680年）をテーマとする。しかし、通常注目される公的な場所に設置された代表的大作ではなく、人間の「死」に関連した表象に焦点を絞り、考察を加えた点に大きな特徴がある。全体は4章から構成され、最初のふたつの章では、ベルニーニ作品における「死」の寓意像の展開とその宗教的・社会的背景を論じる。後半のふたつの章では、ベルニーニ自身が自らの死と向き合うようになった晩年期の特徴的な作品をとりあげ、それらの構想の背景やベルニーニの造形の着想源について詳細な考察を加えている。

まず第一章では、キリスト教の教えにおける善き死を迎えるための心得、すなわち「アルス・モリエンデイ＝往生術」と呼ばれる実践の歴史を概観し、それが中世後期に興隆したのち、16世紀後半には一時沈滞がみられるが、17世紀になるとイエズス会による奨励をひとつの要因として、再びイタリアで広く実践されるようになる経緯を概観する。

続く第二章では、前章で示した歴史的経緯に呼応するように、ベルニーニによって制作された頌徳碑や墓碑彫刻において、髑髏や骸骨によって表される「死」の像が次第に重要性を増していく過程を叙述する。はじめそれは髑髏による単純な寓意的・記号的表現であったものが、やがて全身をもって演劇的に「行為」する姿の表現に変じていく。筆者はこの特徴的な変化が1630年頃に生じていることを、作品の系列および大型墓碑彫刻の構想の変化に看取り、さらにそうした変化の社会的・心理的背景として、当時のイタリアを襲った疫病の流行を指摘している。

第三章では、ベルニーニが晩年期に入った1670年に制作した、特異な図像を示す素描《キリストの血》（ハールレム、テイラス美術館）に関する詳細な考察を行なう。この素描は、茫漠たる海の上に浮遊するキリストの磔刑像を描いており、キリストのわき腹から噴き出る血が、実はこの広大な海となっているのである。筆者は先行研究をふまえて、この素描が一種の往生術の補助手段としてイメージ化されていること、すなわち人が死に臨んでの観想に用いるものとして構想されていることを確認する。さらに、同素描の用途と密接に関連するベルニーニの近親者の著書のテキストを詳しく検討することで、「血の海の上に浮かぶ磔刑像」というユニークな構想がテキストの一部と正確に呼応していることを具体的に指摘し、また、その造形的着想源としては、磔刑の図像に加えて、むしろ洗礼の予型とされる旧約聖書の主題「ノアの大洪水」や「紅海渡渉」の図像伝統が活用されているという、独自の見解を提示した。

第四章では、やはりベルニーニが晩年に制作した大理石像《救世主キリスト》（1679年頃、ローマ、サン・セバスティアノー・フオーリ・レ・ムーラ聖堂）を取り上げる。この作品はベルニーニが顧客からの依頼で制作したものではなく、自発的に企画した作品であるという点で、また意外なことにベルニーニがキリ

ストの大理石像に正面から取り組んだほぼ唯一の作例である点で、注目に値する。筆者はこの像の制作を、やはり死を目前にした老彫刻家による一種の信仰表明の行為ととらえ、その着想源について考察を加えている。筆者の仮説によれば、この像の表現上の特徴は、ベルニーニが初期キリスト教時代のキリスト像、すなわち彼が多くの造営事業に関わったサン・ピエトロ大聖堂の地下でかつて発見された4世紀の石棺浮彫を参照した可能性を示唆している。バロック時代のローマにおける初期教会の歴史に対する関心の高まりや考古学的調査のさかんな実践を背景に考えて、この仮説は非常に魅力的であるが、一方、視覚的な比較の点では、確実な説得力をもつにはいたっていない。

以上のように、本論文はベルニーニの作品を軸としつつ、ローマ・カトリック教会および17世紀の人々の「死」の対する向き合い方を問題にする文化史的射程をもつもので、この着想の独自性はきわめて興味深く、大いに評価しうるところである。また、必ずしもベルニーニの代表作とはいえない晩年の特異な作品を取り上げ、独自の知見を加えた点も、学術的な貢献といえるだろう。ただし一方で、非常に広がり大きい問題を扱ったがゆえに、歴史的考察の周到さ・厳密さの点でややゆきとどかない面が残った感はいなめない。たとえば、当時の解剖学における人体構造の表現伝統や、葬儀の棺台のような仮設装飾における死の寓意像の表現といった問題については、考察が不十分な結果となった。こうした点は、今後さらなる研鑽を通じて論の展開をのぞみたい。とはいえ、バロック時代のローマにおける「死」の表象とその背景をなす思想について、興味深い考察の領域を拓き、いくつかの新たな知見を提供した点で、本論文は学位授与に十分値する貢献と考えることができるであろう。